本文の転載に当たっては事前に著者の許諾をとってください。

犬聟入考

篠田知和基

「犬聟入」は伝播譚である。また犬の文化は汎世界的ひろがりを示している。しかし、「異類婚説話」を概観したとき、蛇、鳥、魚、蛙などに平行関係が認められるのに対し、西欧では「犬聟」は表面的にはあらわれてこない。

四足獣がいないわけではなく、西欧流の「魔法にかけられた王子または王女」は、猫、山羊、鹿、豚、馬などに広く見られる。日本の狐女房も、西欧の猫や鹿の例と比較すれば同種のものと認められるが、犬のばあいはそうはいかない。

日本の「犬聟」譚の特色は、動物が人間への変身のプロセスを経ずに人間の女に求婚をし、一緒になることで、「猿聟」、「馬娘婚姻譚」、あるいは「田螺息子」に共通して見られる特性である。

しかし、タニシのばあいは最後は人間に変身をしてハッピーエンドを迎える。婚礼の日に花嫁がタニシを足で踏みつぶして変身させる例や、その日の前にタニシが姿を消して、立派な美青年になって戻ってくる例もあるから「変身」と「婚姻」は話によって多少ずれていても、やはり、相互に関係している。

馬のばあいも、蚕ではあるが変身をする。娘と馬の結びつきも神話的である。神婚説話と言ってよい。

それに対して日本の犬聟は、一見卑俗な要素が強く、世間話的様相を呈しているようにも思われる。『今昔』にある「北山の狗……云々」の話も、変身や神婚のモチーフを持たないたんなる猟奇譚とも見られる。

つぎの沖縄の話も合理化が進んでいて神話のレヴェルからは遠く、超自然性も稀薄である。

「犬聟入」

赤ちゃんを抱いて、母親がいつも便をさせていた。すると、犬が走って来ては女の子の尻を舐めたり、便を舐めたりしていた。毎日その様なことが続いていた。母親の言うには、

「舐めれ、舐めれ、大きくなったらお前の妻にするから」と言っていた。犬はいつもきれいに舐めていた。

そして幾年かたち、その女の子は嫁に行った。行った所は村はずれの淋しい所だった。夫は、狩をする人だったので、家にいる日が少なかった。もう子供が七人もいた。不思議なことには、犬が毎日のよう

に豚や魚を持って、女の所にやってきた。そして女に煮させて、犬も食べた。村の人の言うには、あなたの所の犬はよその家からいろいろなものを盗んで、あなたの所へ持って行くと言った。

ある日、男は山に行くと言って、高い木に登って様子を見ていた。案の定その女は、犬の妻になっていた。男は癇にさわって、その犬を殺そうと追いかけたが、犬が逃げたので殺すことができず、帰って来た。男に知れたと思った女は、その夜黙って寝るふりをして、夜中にその男を剃刀で殺してしまった。

だから、かねてから言葉は良い言葉を使うように、心がけなければいけないと。

（話者　藤井為千代）

まさにこの「犬聟入り」の話は、日本独特の話型とも見られるかもしれない。[1]

しかし、手柄をたてた犬が王女を褒賞として欲し、山中に入って一族の祖となった話（槃瓠説話）、女ともども海に流されて、たどりついた島の始祖となった話（海南島）は中国の南部にひろまっている。[2]

あとの話では子供が知らずに自分の親である犬を殺す。[3] そこから、狩人が犬を殺すモチーフが展開してくるとも考えられる。

すなわち、「七人の子をなすとも女に心を許すな」[4]という部分こそ日本独特でも、犬と女の交婚譚は海のかなたから伝播してきた話であろうと思われる。

ある一点から他の一点への説話の伝播があったとすると、ほかの

二

地点へも同じ話が伝播していると考えるのがふつうである。[5]

たとえばこれがインドあたりから来た話なら、同じ話がヨーロッパにも伝わっていてもおかしくはない。

三品彰英によれば、犬を始祖とする獣祖説話は中央アジアに広く広まっている。[6]

ところがヨーロッパでは犬祖説話は知られていない。

はたして、犬祖説話はヨーロッパには存在せず、「犬聟入り」も発達しなかったのだろうか？

それとも、動物種の交代などで、不透明になっているだけで、実は同じ話が存在するのだろうか？

差異の説明としてはひとつは養蚕説話との接続が考えられる。槃瓠説話では、女の耳から出た繭（状のもの）を瓠に入れておくと犬になる。これがのちに海南島の説話や日本の沖縄の話などのように鐘とか、稲づみの下に何日か隠れて人間になる話に展開するものとみられる。いずれも、そのもとは蚕の変身のイメージがあるだろう。

『今昔』の「犬頭糸」の話でも、蚕を食べた犬の鼻から珍しい糸が出る。（この犬が死んだあとその死体から桑の木が生える）。[7]

より直接的な養蚕起源説話である馬娘婚姻譚でも、手柄をたてた馬が娘と夫婦になろうとする、あるいは娘に用便をさせるたびに馬にあと始末をさせて、ゆくゆくはおまえの嫁にしてやると約束をするといったモチーフは犬祖説話と共通している。[8] どちらが古いかは一概には言えないが、犬の話と馬の話が関係があることはたしかだ

ろう。であれば、犬が蚕になった話があってもふしぎはない。

蚕はヨーロッパにも伝わったが、養蚕起源説話としては、ユスティニアス帝に派遣された僧侶が杖の中に蚕の種を隠して持ってきたという、きわめて文化的なものしか知られていない。[9] 蚕の伝播の時期が、昔話や神話の形成される時代を過ぎていたせいとも思われる。したがって、犬聟の話が蚕起源説話の変型であるなら、それが蚕文化圏にのみひろまっていることもありえよう。しかし、この話の分布の濃い沖縄ではあまり養蚕はおこなわれていない。

もうひとつは「犬聟」と洪水説話の関連である。槃瓠説話のひさごは洪水説話によく登場する小道具である。兄妹が大洪水にさいし、巨大なひょうたんに入って逃れた話が中国にある。[10] 犬祖譚でも海南島の例は君候の傷を治した犬が娘を要求したところ、娘とともに舟に乗せられて流され、海南島に流れつく。これは養蚕起源説話のうつぼ舟モチーフとも接続する。[11] 三品はこれを箱舟漂流型始祖譚と結合した特殊例としているが（前出書四三二頁）、漂流モチーフは沖縄にもある。

それ以上に水界から流れつく犬の話としては、オランカイの始祖伝説で、水中から出てきた犬が川べりで洗濯をしていた女を犯してはらませた話がある。[12]（三品前出書四一六頁）。

もちろん「花咲爺」の犬もあり、また「竜宮小犬」もある。犬は水界と縁がある。「竜宮小犬」との関係から言えば、竜神の使い神でさえある。しかしそれは竜神文化圏でのことで、たとえば箱舟漂流型始祖譚のない文化圏には関係がない。

ただし洪水神話も箱舟漂流モチーフも汎世界的分布を示している神話である。フレイザーやランクを見るまでもなく、必ずしも海洋民族にのみ特有のものでもなく、また、水田稲作圏のものでもない。

さらに「花咲爺」は「宝さがし」説話であり、山中を犬を連れて漂泊しながら、鉱脈をさがす人々、おおくは狩人の伝承である。これが中国で畑を耕す犬の話「狗耕田」になるというのは定説ではあるが国際話型分類からすると疑問がないわけではない。[13]

「狗耕田」は遺産を兄弟で分けたときに犬一匹を受けとった弟が、その犬のおかげで富を得る話で、遺産として牛を受けとった「牛飼いと織女」の話とも通底する。[14] 国際分類ではむしろわずかな遺産が富をもたらす話で、「錬金術モチーフ」とも言いうる。例としてはAT五四五番やAT三〇〇番、AT三一五番などの話が思いおこされる。また犬を遺産として受けとって、その犬が竜退治をする話はよく知られている。

その犬がブリーズ・フェール（鉄斬り）といった金属文化との接続を暗示する名前であることが注目される。

「花咲爺」の犬も、水界からやってきて、山中の金銀のありかを教え、その死体から生えた木で臼を作れば金が出る。内藤正敏はこれを金を精錬する水碓であると言う。[15]

『今昔』の犬頭糸の犬も、その死体から桑が生える。死体化生というより、物質変成の話である。西欧の文脈で言えば錬金術的物質

変成である。

金を生む犬ということでは「竜宮小犬」も同じである。これもあとで見るように西欧にも認められるモチーフから成りたっている。

犬聟も、異なる二物質の化合の寓意と読めないこともない。その結合から生じる金を竜宮小犬の金、あるいはその小犬そのものとすることもできる。

金をひる動物は西欧ではロバである。日本でも「江差郡昔話」には「沼の主から黄金の駒を貰ったと謂う男の話」がある。竜宮小犬と同じで、米一合で、黄金一粒の糞をする。水中から出てくる動物では「河童駒引」に見るように馬が東西に共通している。

黄金譚は西欧ではいわゆる「黄金メルヒェン」である「マリアの娘（710）」、「黄金の髪の少年（315）」、「黄金の髪の美女（531）」に見られる。このうち315と531のタイプの話では「ふしぎな馬」が登場する。531番話と似た550番話も「金の鳥」、「金のリンゴ」として「黄金モチーフ」が使われる。「ふしぎな馬」も「黄金の馬」であってもふしぎはない。金や鉄の加工に秀でていた中央アジアの騎馬民族の伝承ともみなされる。

あるいは騎馬の金工民の伝承が農耕地帯を経て日本には「金をひる犬」となって伝わったのかもしれない。犬と馬の伝承の微妙な交錯がその想像を裏づける。「犬聟」と「馬娘婚姻譚」は「動物の手柄」または「用便の始末」のどちらかのモチーフではじまる。どちらも犬のばあいと馬のばあいがある。しかし日本では犬は「用便の始末」モチーフが多い。「大成」の要約話十二例のうち十一例がそれである。これもあるいは「黄金」モチーフかもしれない。

「金をひる馬」にしても、そのもとは「馬に乗った金工民」だったなら、それが「犬を連れた金工民」、「金をひる犬」になり、さらに「黄金の糞を食べる犬」になってもふしぎはない。[16]

「犬聟」が東北地方で少ないかわりに、東北では馬の話や、あるいは「竜宮小犬」「鼻たれ小僧」が多く聞かれる。さらには東北地方の「黄金メルヒェン」である「死体黄金譚」が出てくる。いずれも黄金のからんだ物質変成譚である。（そしてもちろん「金売吉次」や「炭焼小五郎」譚がある）。

ところで、宮城の伊具郡の犬聟譚では、犬と女のあいだに子ができて、シッペ太郎と名づける。[17] 一般にシッペ太郎と言えば猿神退治の犬である。犬聟譚なら敵将の首を噛み切ってくるところを、シッペイ太郎は怪物の首を噛み切る。

この話のばあい、西欧の竜退治譚とはほとんど完全な平行関係がなりたつ。主役は忠犬である。相手は猿の経立、あるいは竜で、武勲の褒賞は王女である。

竜と猿の交代は、西欧での猿の欠如によってまず説明される。ついで、竜―水中の馬、の連関をたどることで、猿と馬の関係に達することができる。[18] 猿は「河童駒引」に見るように、馬の口輪をとる存在、ないし、馬の使い神である。

一方では犬と馬が交代可能だが、ここでは犬は、馬―猿―竜に対

して、攻撃者の立場に立つ。もっとも、殺すものと殺されるものの関係も多分に両義的ではある。

標準的な竜退治の話は一、犬を連れた主人公が人身御供の身がわりになって、犬の助けで怪物を退治する、二、炭焼きが手柄を横どりして王女と結婚しようとする。[19] 三、証拠の品を見せて主人公がすりかえを暴露する、という構成だが、ひとつは犬の登場について、一、超自然の援助者からもらう、二、父親の遺産としてもらう（あるいは他の遺産を犬ととりかえる）という話がつけ加わるのと、主人公の誕生について一、熊の子、二、魚の王の子というばあいがある。熊の子はたいてい「桃太郎」と同じく、旅の途中で三人の仲間を拾ってゆく。魚の王の話だと、魚の肉を食べた女が三つ子を生み、魚の骨から三匹の犬と三頭の馬が生まれ、[20] この犬と馬の助けで、末息子が怪物を退治する。（あるいは長男が怪物を退治して王女と結婚したあと、魔女につかまってしまうのを末息子が助けに行く）。

このタイプと三〇〇番型とに、主人公が魔女とかかわりあうところで、魔女が犬を魔法の綱（髪の毛など）で縛るモチーフが出る。[21]

熊の子タイプ以外では犬はほとんど不可欠である。怪物は竜とはかぎらないから日本の猿神でも違和感はない。熊の子＝桃太郎タイプで出てくる「旅の仲間」は、桃太郎ならイヌ、キジ、サルだが「力太郎」だと「御堂かつぎ」・「力太郎」などと呼び、ヨーロッパでも「樫抜き」「山ならし」、「石臼なげ」などと言う。これは三〇〇番の犬が「鉄斬り」「疾風」「山くぐり」などと言うのと同じで、いずれも犬の仲間と考えられる。

怪物との戦いでは馬か犬が主人公のかわりに活躍するのが本来の形と思われる。馬と犬のどちらが先かはわからないが、頻度では犬のほうが高い。それに「ふしぎな馬」は、走ることにかけては立派なものだが、怪物退治での活躍は馬本来のものではあるまい。

遺産として与えられるばあいには犬ないし、犬ととりかえることになる山羊である。このモチーフは三一五の「不実な妹」ではほとんどのヴァージョンに共通している。[21]

ここでも犬の名前は「疾風」、「通り抜け」、「ぶっち切り」、（低ブルターニュの「三匹の犬」、リュゼル採集話）などと言う。ここでは魔女が、主人公の三匹の犬を髪の毛で結ぶ。猛犬や狼を、けっして切れない綱や鎖で結わえるというのはフェンリルなどの神話によくあるモチーフだが、特別に丈夫な鎖は金属文化に属する。岩を断ち斬る剣、ひとりでに敵の首をはねてくる剣などと並んで、けっして切れない鎖、どうしても溶けない金の鎖（白鳥の子）などは、特殊な合金や、すぐれた鋼の技術を物語る。この魔女が主人公を連れてゆくのが地底の城であるのは、地底の鉱山を思わせる。老婆（ないし他の伝承での小人）は地下の鉱脈を管理する製鉄族の妖精である。その地下の宝を犬を連れた狩人がさがしあてる。三〇〇番話で犬が戦う怪物も洞穴に住んでいる。竜であれば鉱山や地下の宝ものの番をする竜が思いうかぶ。

そのあたりは地下の宝ものを掘りださせる「花咲爺」の犬や、製

鉄の神、金屋子神伝承に登場する犬を思わせる。（金屋子神が地上に降臨したときにいちはやく発見したのも、またのちに彼女に吠えついて死なせたのも犬である。女神はその死によって鉄をいっそうよく涌かせた[23]）。

ブルターニュの「三匹の犬」では、不実な妹が鍛冶屋に頼んで特製の犂を作らせ、兄の寝床に仕込んでおいて彼を殺す。そのあと三匹の犬が彼を墓穴から掘りだして身体をなめあげて生き返らせる[24]。

最後にこの三匹の犬は細切れにしてもらって、三人の王子に生き返る。三〇〇番話タイプの話で、王女救出に向かった三人の王子が魔女に犬に変えられていたのだ。このあたりは、「犬を連れた勇士」と「犬になる王子」の入れかわりで、動物の象徴性としては同じものと思われる。三人の王子はもちろん三人の王女と結ばれる。犬が魔法をとかれて人間になって王女と結婚する変型した異類婚である。

この怪物退治の話からつながってくるのは「青髭」で、トンプソンの分類では「犬と人食い鬼」と言う。フランス版の「青髭」でも女が連れていた犬が兄弟のところへ走って急を知らせるが、ほかの国の話では犬の働きはもう少し積極的である。「（ペロー）の影響圏外できかれる話では、兄弟が犬その他の動物と一緒に助けにくる」（トンプソン『民間説話』二六八頁）。すなわち処女の人身御供を求める怪物を犬を連れた英雄が退治する話だ。

その種の淫獣の話は中国の「白猿伝」にも見られる。「美女奪還」のタイプの昔話の原話とされているが、鬼に奪われた妻をさがして山の中へ入ると大猿のハーレムがあり、さらわれた女たちが大猿にかしづいている。猿は犬の肉で酒を飲むのを楽しみにしているから、犬を連れて出直してくるようにと女たちに言われる。やはり「犬を連れた英雄」である。酒に酔った猿は女たちに切れない紐で結わえられて、主人公によって殺される。

義犬としては「ギヌフォール聖人伝」の犬が思いだされる。起源はおそらくジャータカである。蛇が主人を呑みこもうとするのを犬が吠えて急を告げる。主人が誤解して犬を殺す。斬られた首がとびあがって蛇を殺す[25]。

犬が主人の留守に子守りをしていて、襲ってきた蛇を殺すばあいもある。

もうひとつのタイプは、野原で眠っているうちに野火に包まれて焼け死にそうになったときに犬が水を身体に浸みこませてきて助ける。（「捜神記」）

この種の義犬伝説は汎世界的に存在しているが、その中でアイルランドの「光の剣[26]」に名剣伝説との接合があることが注目される。もうひとつはその犬（ないし狼）が、魔法にかけられた王子であることだ。

光の剣を探しに行った主人公が、剣の持ち主から犬変身譚を聞く。名剣鍛造の秘密を語る寓話とも読みとれる。昔の刀匠は、そのようにして寓話の形で技術の秘密を弟子に伝授したとも考えられる。

妻の悪意によって犬に変身させられる話は「アーサー王とゴーラ

ゴン」にもあり[27]、また、昔話国際話型の四四九番「シディ・ヌーマン」ないし「皇帝の犬」の話でもあるが、この犬が父である王の庇護を受けて、実の弟である幼な子の揺りかごを守っていると、天井から（というのは天窓からと言うことだろうが）巨大な腕がのびてきて弟をさらっていこうとする。そこをすかさず犬がとびかかって腕を食いちぎる。

これを年々子供が生まれるたびにさらってゆく怪物の話とすれば、毎年処女の人身御供を求める竜ないし猿神の話と同じである[28]。あるいは英雄によって斬りとられた怪物の腕の話なら渡辺綱の鬼退治だ。この怪物は佐竹昭広によれば「鍛冶屋の婆」のヴァリエーションである（『酒呑童子』）。高木敏雄によれば「鍛冶屋の婆」は日本の人狼譚だ。昔話の四四九番についてもアルフ＝ランクネールは人狼譚の昔話版であるとする。（『中世の動物と変身譚』）

この一連の物語は、変身と鍛冶のモチーフをふくんだ怪物退治の物語で、中心的な役割を演ずるのは犬に変身した人間、ないし名剣である。

地中から金銀、すなわち地下の鉱物資源を掘りださせる犬（「花咲爺」）と、これらの物語の犬は性格を共有している。すなわち、名剣獲得（鍛造）の仲介、ないし、そのプロセスの象徴である。

その怪物が処女の人身御供を求めるばあいは「青髭」―「白猿伝」にも近くなり、それが略奪婚の名残りなら、猿聟や犬聟譚とも遠くはない。

冒頭の奄美の話でも、また全国の類話でも一見、本筋とは関係のなさそうな狩人による犬の殺害が、意外に外国の話との接点を隠しているかもしれない。犬が処女を略奪する怪物であるなら、狩人は怪物退治の英雄である。

怪物退治の英雄が救いだした王女と結ばれるものの、女の悪意によって動物に変身させられたり裏切られたりする話は珍しくない。手柄をたてたものに王女を与えると王が約束する。主人公が条件を満たして王女を要求するが、王女は嫌がって、何とか夫をなきものにしようとする[29]。

この種の話と、手柄をたてた犬が王女をもらうものの、王によって追放され、さらに狩人によって殺される話とは構造的には同じである。

「猿神退治」では、犬だけが活躍するのではないばあい、おおくは主人公が刀を隠して持っていって猿の群れを退治する。鋼鉄の刀で、石器文化の時代にとどまっている未開部族を皆殺しにする話に相当する[30]。「犬聟入」は異国の鍛冶族による征服の物語である。

猿にしろ犬にしろ異人をあらわすことはまちがいない。青髭も白人国における「黒い肌」とか、黒い髪の文化圏における赤い髪とか、天狗とかに相当する。異種・異色性の記号である。（ちなみに天狗も「天の犬」である[31]）。

異種異類としてはイシドール・ド・セビリャ以降の「犬頭人」伝承が指し示しているもの（「人語を解せず、話せば犬の吠え声であ

り、衣類を知らず獣皮をまとい、生肉を引き裂いて食う云々」）ももちろん異種族、あるいは未開社会の人々である。ちなみに、この「犬頭人」の記述は『新五代史』の「北狗国人」の記述とほぼ一致する。これが中国ないしインドから西漸したものであることは疑いをえない。

ゴードン・ホワイトはヨーロッパの「犬頭人」を「野性人」（六八頁）と規定している。[32] 槃瓠神話でも犬の子孫は山に住み、樹皮の衣を着て、異様な言葉を話すとされている。都や宮廷の文化から疎外された方向を「犬」は指し示している。

日本でも狩人に伴われた犬はあきらかに野生の方向を示している。あるいは宮古島などの始祖神話でも、漂着した犬は「異族」にはちがいない。

そのような、境界性をあらわす「犬」と、番犬、愛玩犬としての犬のイメージを混同すると神話の意味をとりちがえる。[33]

神話の犬としては、エジプトいらい西欧には死者の魂をくわえてゆく犬、あるいは冥界の番犬、アヌビス、ケルベロスがいる。

一方、わが国では安産の守り神としての犬がいる。はたして犬は死をあらわすのか生をあらわすのか、闇なのか光なのか。

冥界の犬と安産の神は同じものである可能性がある。[34] 死者の魂を冥界へくわえてゆく魂の運び屋は、またそこから新しく生まれるものの魂を地上にもたらすだろう。

とりわけ、ヨーロッパの民俗の世界で、この地獄の犬が「死の軍勢」の猟犬として考えられるときには豊饒神との接続が考えられる。ギンズブルクやクロード・シュミットは、この「死の軍勢」が北の世界では「ディアーナの狩」になると考える。[35]

狩猟神ディアーナが犬を従えているのは当然である。これが他の神格、ベルヒタ、ペルヒタ、ホルダ等であると、光の神、あるいは農耕豊饒の神格の要素が強くなるが、この伝承がもともとは「荒猟師」の騎行と呼ばれ、狩に熱中した暴戻な領主に課された劫罰の形であって、猟犬隊が不可欠であることを考えれば、狩猟神の要素は否定できない。それに伝承によればこの「呪われた狩」は、狂ったように吠えたてる犬たちの吠え声だけだとも言う。

「死の軍勢」・「呪われた狩」において、犬は中心的な役割を演ずる。一方、それを神話的に代表するものは、ディアーナ、ペルヒタ、ヘカテ、そしてフランスでは〈アボンド奥方〉である。狩と光と地獄と、豊饒（アボンド）とがパラダイムを構成する。

ディアーナ＝アルテミスも男嫌いの狩猟神としたのはギリシャ神話で、民俗の世界では豊饒神である。

異人（山人）とは排除される存在である。しかし、同じ人間だから、ときおりは里にあらわれて里の女と交渉を持つこともある。そうやって生まれた〈鬼子〉は、ただちに山中に捨てられ、あるいは海に流される。

日本の犬が、「花咲爺」や「竜宮小犬」のように村境を流れる川からやってくるのは、彼らの「異類性」を明確にする。

鬼子を海に流すのも、犬が川を流れてくるのも同じことだ。

以上の諸点を総合すると、ヨーロッパにも日本と同じような犬聟譚があってもいいように思われる。事実、たとえばデュションの採集になるブルボネ地方の昔話には、とある女が白犬をかわいがっているうちに犬の仔を生んだ話がある。四二五番話では、怪物聟が犬のばあいが、メラック、カディック、ピノーなどにある。また、王の難題をすべて解決して王女をもらいうける賢い犬の話もある。ミリアンの話を入れて約十例は犬人通婚譚がある。

そのほかに、犬娘婚姻譚の隠蔽された形として、「犬の子を生む話」、あるいは「犬の仔を生んだとして迫害される女の話」がいくつかある。

とくに七〇六番「手なし娘」では、犬の子を生んだという虚偽の告発がされ、七一〇番「マリアの娘」でも、王妃の生む子供はつぎつぎに奪われる。四五〇番～四五一番でも生まれた子供を自ら食べたという偽りの告発をされる。いずれも、出産にまつわる女の受難の物語で、原型は子を奪われたリアノンの話であろう。生まれる子供をつぎつぎに失ったリアノンは自ら子供を食べたものと疑われる。城の入口につながれて犬の食物を与えられていたのは別な王妃だが、彼女たちにおける受難の獣的なアスペクトにかわりはない。

獣的世界が人間の生活にもっとも近い犬によってあらわされるのは逆説的なようだが、犬こそ、人間の原始状態の証言者なのかもしれない。

いままで検討してきた物語は、犬聟、青髭、犬祖伝、猿神、義犬伝、花咲爺、金屋子神、等々と、さまざまな話型にまたがったそれぞれ別の話のように見えるかもしれない。しかし、神から怪物へ、そして馴化されて家畜となる動物の変遷に一致させてみると、必ずしも別個の話のよせ集めとも思われない。

犬祖譚が文化的に変容してくると、犬を殺す話がつけ加わる。やがてはそれが犬を殺した猟師とそれに対する女の復讐の話に重点が移る。

犬がはじめにいなければ女が夫を犬にする話にもなりうる。いずれにしても女が主導権を握っている。犬聟でも、八房と伏姫のように犬が女にかしづく型が多い。

もし犬のほうが横暴であれば、怪物が女をさらってゆく話になる。ここでも猿聟なら女が夫を谷川につき落として殺す。三一一番話だと青髭（ないし悪魔）を女がだまして翻弄する。

そこでは一、犬自身が退治されるべき怪物であるばあい、二、犬が怪物を退治するばあい、三、犬が怪物退治の英雄の手伝いをするばあいの三種があるが、女の略奪と、怪物退治による女の奪還とは同じである。

猟師が犬を殺すばあいも、本来なら猟師が犬を連れているはずだし、一人で獲物をとってきて女に与える犬は猟師の役をはたしていると考えてさしつかえない。

人と怪物のあいだで、犬は動物（怪物）のほうを表わすこともあ

れば人間の側につくこともあり、その双方のあいだの仲介者ないし、使者となることもある。

「シッペイ太郎」や「光の剣」では、怪物の腕を噛み切り、あるいはその息の根をとめる犬は、犬の出ない話での名剣の役割を演じ、あるいは名剣を手に入れる手助けをする。これは金屋子神を死に至らしめて、かえって、鉄の精錬を増進した犬の働らきとも通ずるところだ。

犬聟入りは、結局、猿聟と馬娘婚姻譚とともにパラダイムを構成していた。つまり、蛇聟などとちがって変身を前提としない異類婚だ。日本と西欧のちがいも主としてそこにあったかに思われた。しかしまさに動物種を犬に限定せずに猿と馬に拡張することにおいて、西欧で猿にかわる熊、そして、馬と猿の双方の性格を持ったロバにおいて、西欧でも類似の事例が見られた。

一方、犬聟を神から怪物になり、やがて家畜ないし人間となる動物種との接触の証言とすると、人身御供を要求する怪物や、女を奪ってゆく淫獣、そして、青髭までの略奪婚の物語ともつながってゆく。

西欧でその代表的な例は人身御供を求める竜であり、女をさらってゆく青髭だった。竜のばあいは日本の猿神退治譚と平行し、犬の働らきも共通する。犬聟のうち犬が怪物と怪物退治者の二つに分化したときは、猿神—竜退治譚となった。

青髭のばあいは、肌や髭の色の特異性で区別、差別される異人であり、毛深い「野性人」、さらに動物に近づいた「熊」、その中間の

ピレネの「バサ・ジョーン」[36]、あるいは人食い鬼などによってあらわされ、日本では「山人」、「天狗」などのイメージだが、より神話的には「犬」、それも水界から漂着する犬が「青髭」のイメージを担っていた。そこには夷狄を犬の類語（犬戎・北狗等）であらわす中国文化の影響もあっただろう。しかし実はその夷狄のほうが金属加工技術に裏打ちされた武力的優位性を持っていた。

とすると日本に水界から来た異人との接触を象徴する「犬聟」として伝わった話は西欧では「竜退治」や「青髭」ないし「熊男」として髭や肌の色のちがいで区別された異人の物語として発達したと考えることが許されそうである。しかし、犬が日本のばあいの特異性であるかと言えばそうとも断定できない。いや、むしろ西欧の竜や青髭の話でもつねに、犬が一定の役割を演じていることが注目される。

始祖伝としての犬祖説話も、またそれに代わるものも西欧には見あたらないことは、説話成立の時代の文化性によって説明できよう。西欧人は神話時代を無文字文化期において過ごし、先進文明に途中から吸収されてしまって独自の神話を形成しえなかったからである。

一方、わが国に見られる「女の仇討ち」のような物語化への展開は、これまた西欧では見られないようだが、これは昔話をはなれて、「デカメロン」のようなノヴェラの世界へ行けばいくらでも見られる小説的展開であって、文化の管理が長く民衆に委ねられていた地域と、文化のエリート化が進み、無文字大衆と識字層の分離が長く

つづいていた地域との差とも言えるのではないだろうか。[37]

文学の世界では、わが国の中勘助の「犬」に対して、フランスでは主として雌犬の淫乱さを描いた作品が多いが、日本にならって、犬と馬の交替が可能であると考えると、馬に夢中になった女を亭主が嫉妬して馬を殺したところ、女が復讐をはかるという、日本の「犬聟」そっくりの話がモーパッサンにあったのが思いだされる。[38]これをもちろん「伝播」とは言うまい。人間の心の動きは、日本でもフランスでも同じような物語になるのだとだけ言っておこう。

注

(1) 福田晃氏は「犬聟入りの主題は妻の仇討である」として、「この点こそ近隣諸国諸島の犬聟入譚とちがっている」としている。(「昔話の北上と南下」『昔話の発生と伝播』一九八四、二七〇頁) 2、福田氏は前期論文で、槃瓠伝説は「華南の山岳地帯からベトナム・ラオス、タイの北部山地、ビルマの北東山岳地帯にあって、元来は狩猟を業としながら、今日は主に焼畑耕作に従事する畲族、苗族、猺族などの少数民族の間に伝承されてきた」ものとする。

三品彰英は『獣祖神話』の中で、狩猟を主とする地方ツングース諸族(オランカイ他)に見られるのを古態とし、南蛮系諸族のように「すでに農耕に移行した諸族の間」に見られるものは「残存文化要素」と見ている。(『獣祖神話』、三品彰英論文集、四四七頁) 三品は「南蛮諸族」も、山岳地帯では依然として「太古さながらの生活をつづけ」(四四八頁)ていると言う。つまり狩猟民というわけだ。

(2) 海南島の例は注11に要約する。

(3) 母と交わり、父を殺すオイディプス譚と、犬祖説話と、これはどちらが優先するのだろうか? 犬祖説話とすれば、犬から生まれた血筋を、犬を殺して母と交わることで薄めて人間の血を濃くする操作とも見られる。いずれにしても犬は殺されなければならない。義犬伝説の犬も、シッペイ太郎も、犬聟の犬もいずれも殺される。それは原則として不幸な結末で終る日本の昔話だけのことではなく、ヨーロッパでも義犬は誤解して殺される。

(4) 奄美大島、久永ナヲマツの話、ほか、きわめて広く語られる結語。ちなみに日本の犬聟譚を要約した福田の分析をつぎにかかげる。VIIのモチーフがことわざである。

〈発端〉

(I) 親が、女の子を嫁にやると約束して、その子の用便のたびごとに、それを犬になめさせる。(犬との約束)

(II) 女が嫁入りしようとすると、その犬が邪魔をする。女は犬の妻となって、いっしょに山に入る。(女と犬との結婚)

〈展開〉

(III) 猟師がやってきて、その女を妻にしようと、ひそかに犬を殺す。(猟師の犬殺し)

(IV) 猟師は女を妻として暮らす。そのうちに、七人までも子どもが生まれる。(猟師と女との結婚)

〈結末〉

(V) もはや安心と、女に鬚を剃らせる折に、猟師は自分が犬を殺したことを女に告げる。(猟師の告白)

(VI) 女はそれを聞くと、剃刀で猟師の喉を切って殺す。(女の仇討)

(VII) それゆえ、ことわざで「七人の子はなすとも女に心許すな」という。(教訓)

(5) 三品は、しかし、「南蛮諸族」と北方狩猟民とにおいては、同じ

話ながら別々に発達したものと考えている。同時発生とまでは言えないが、話として固定しないまま移動した話柄が、それぞれ別個に発展して物語化する。そのばあいには別な話と考えてもいい。たしかに北方の狼祖伝承と南の槃瓠神話、それに海南島などの漂流型を加味した話は別であろうし、狼祖説話のヴァリエーションとしての犬祖説話も同じだろう。

(6) もっとも前述のとおり、同じ犬祖説話でもいくつかの系統がある。中でも「成吉思汗実録」に言う蒙古族の阿蘭媛の伝承は、あきらかに別話である。「夜ごとに光る黄色の人房の天窓の戸口の明処より入りて……出づるには、日月の光にて、黄狗の如く這ひて出づる」とある。「黒き頭の人」とちがう黄毛人を想像させられる。さもなくば、日光感精説話である。

なお西欧ではメリュジーヌ譚のように、竜を始祖とする話はあるが、獣祖譚は少ない。（トルコその他では熊を始祖とする話があることは前編「熊のフォークロア」でふれた）。しかしメリュジーヌ譚もスキタイ族の流れを汲む部族の伝承であると言う。

竜と言えば海洋民族か水田稲作民族の伝承のようにも思われ、三品の言う卵生説話群に入りそうにも思われる。水をあまり必要としない麦作地帯の始祖伝説としては竜はそぐわない。伝承の源をスキタイや中央アジアの諸族に求めればなおさらである。どうやらそこには、騎馬民族が移動途中で征服し、その文化に吸収されたオリエントの農耕地帯の信仰の思い出がありそうである。そこには征服者と被征服者の数の上での逆の優劣関係がある。少数精鋭の騎兵隊が優秀な武器と騎馬の行動力をもって農耕民族の守りを蹴散らし、肥沃な田園地帯を占拠したときには、大多数の農民は、はじめは何もできずに新しい支配者を受け入れる。しかし、ひと握りの武力制圧者たちには、土地に根ざした民衆の文化を作りかえる力はない。征服者が文化的には往々にして被征服者となることはよく知られている。

そのひとつとして、獣祖説話を持っていた民族が農耕地帯に侵攻して、農民たちの竜神信仰の影響を受けた結果、竜女神との婚姻で一族が生まれたとする第二始祖神話が成立したケースはないだろうか？

被征服者の文化が圧倒的に強く、また征服者が文化的にもまだ始祖神話の段階におり、定着をするまでにまだ移動を重ねなければならないときには、神話的、文化的被征服もありえたろう。

征服民が農耕地帯に定着したときには、彼らの獣祖信仰と農民の水神信仰が融合して、水神としての馬の信仰が成立することは石田英一郎の指摘するところだ。

しかし犬祖神話の担い手はまだ文化的には微力で、かつ、農耕地帯に定着せずに移動をつづけたから、彼らのトーテムは容易に竜によってのみこまれてしまったかもしれない。それでも本来の犬の神話も消え去らずに残存する。

その後にもう一度、キリスト教文化による征服が行われたときに、かつての文化的制圧者である竜は今度は容易に制圧されてしまうが、犬を連れた狩人による竜退治の物語は、その異教制圧譚の民衆文化による焼き直しなのか、それとも、犬を従えてはじめ農耕地帯に攻め入った彼らの遠い祖先の物語の復活なのか、どちらだろう。聖クリストポロスの物語では、犬は異教徒のしるしとされ、犬頭の野蛮人が洗礼を受けて人間になったとされている。

(7) 参河国始犬頭糸語『今昔物語』本朝世俗二十六・十一

犬の鼻から出てくる糸を巻きとったところ、犬が倒れて死んだというのは、「竜宮小犬」などで欲深婆が一度に沢山の金をださせようとして犬を殺してしまう話を思わせる。

この犬を桑の根方に埋めたところ、その桑に蚕がよくついたと言うので、桑が生えたとは言っていないが、同じ話である。

(8) 福島県相馬郡只野マスイの話、「おっかさんはその娘に小用をさせるたびに「小便しないと馬に喰わせるよ」といっては、させてい

た」（今野円輔『馬娘婚姻譚』岩崎美術、一六四頁）。長野県南安曇郡の話、「ある日、娘に小便をさせる時、その馬の方に向かって『せんだや姫や、じじょ呑めよ、でかくなったら、われにくれるでな』といった。」（前述書一六五頁）。

犬のばあいには大便の始末が多い。犬が人間の汚物清掃をやることが犬の家畜化のはじまりだという説もある。

(9) アンリ・アルグーは『絹』一九八六の中で、ふたつの話を紹介している。ひとつはユスチニアス帝に派遣された二人の僧が中空の杖の中に蚕の卵を隠しもってきたもの、もうひとつは中国の王女がまげの中に卵を隠してきたというものだ。

ちなみにリヨンの絹織物組合の雑誌「シバ」に、金色姫伝承が紹介されていて、「この話は金色の糸を出す野生種の蚕のいるインドから伝わったものと思われる」と注釈がつけられている。（一九四六年、二八五頁）

なお、娘が蚕に変わるという話はあまりに突飛、かつ不合理で、西欧の合理主義では容認されないかとも思われるが、虫と娘が交わる例では、ルーセルの『ミコノ昔話集』一九二〇に、とある王女が一匹の虫をもらって、桶に入れて砂糖で養った話がある。王女が結婚して子供を生むと、この虫が食べてしまう。夫に追いだされて、この虫と暮らしはじめると虫が一旦食べた子供を吐きだす。もちろん最後は虫自身も人間になる。

蛇信仰のある地域だから、この虫は蛇か竜の言いかえとも思われるが、人間になるというところは、生物学的変身の可能性を秘めた芋虫のほうがいいのかもしれない。

(10) 西南中国の伏羲伝承では、雷神の怒りでひきおこされた洪水を、兄妹がフクベに乗って助かり、やがて結婚して人類の祖になる。（袁珂『中国古代神話』他）

話のはじめは男が雷をとらえて鉄の檻の中にとじこめる話で、『霊異記』の雷をつかまえた農夫の話を思わせる。この雷に水を呑ませるとにわかに力を回復して脱出するのは「笛吹聟」やスラブの「鉄人」伝承に通ずる。末段、肉塊を生んで、それを細分したものが人間になったというのは、インドの伝承である。

(11) 海南島の説話は、一、手柄を立てた犬が約束どおり娘を要求、二、父親が娘と犬を舟に乗せて流す。三、二人は島について上陸、やがて子を生む。四、息子がそうと知らずに犬を殺す。五、母親が姿を変えて息子と交わって子孫を残す。という五つのシークエンスから成っている。一の「手柄」は槃瓠説話の敵将退治と同じカテゴリーだろう。二の「島流し」は洪水伝説やうつぼ舟譚につながる。創世説話だ。

槃瓠説話でも犬の夫婦は都からは遠ざけられる。馬娘婚姻譚では、父親は怒って馬を殺す。あるいは、娘がうつぼ舟で流される。この二話は離れているようでいて、実はつながりがある。馬の皮にくるまる葬法と、うつぼ舟で流される葬法が同じものであるとも思われるからだ。うつぼ舟が獣皮を張った舟であればなおさらだ。いずれにしても、異類の嫁は父から否認されて、山か海に流され、あるいは殺される。

漂流譚としては沖縄では、大勢の人が島に漂着したあと、女一人をのぞいて犬に食い殺される話もある。兄と妹だけがひょうたんに入って洪水をのがれた話もある。いずれも同じもので、洪水と、島流しと、近親婚、ないし、獣婚である。

あるいは、女と犬が暮らしている島に、男が一人漂着して宿を乞う話もある。これが島ではなくて、山中なら『今昔』の話である。槃瓠神話の山中異郷も同じカテゴリーだろう。

福建地方の説話で三品の紹介するものでは、手柄をたてた犬が王女をもらうのは同じだが、そのあと、七日、鐘の下に隠れて人に変ずる。鐘の下を島流しや山中への流謫と同義にとるか、どうかだ。

同じ地方の別伝に、変身が途中で中断して、犬頭が残ったというものがある。王女はそれを恥じて森の中に住んだとあるから、流謫

のモチーフはつづいている。さらにこれは「犬頭人」の説話を思いださせる。

変身のモチーフは、槃瓠説話では、話のはじめに、蚕から犬が出るところに出ている。この犬も瓠の中に何日かこもっていて変身をする。鐘の中の七日間と同じである。もちろんこれは子宮の中での変成とも同じで、出生のモチーフとも見れないことはない。

蚕の話なら、馬が蚕になった話も、これと順序が逆なようでいて、実はそうともかぎらない。蚕を犬が食べて糸を吐きだした話も同じで、物質の変成の話で、順序はどうでもいい。

ただし〈馬娘婚姻譚〉と〈金色姫伝承〉はあきらかに別話である。馬に恋した娘が父親の怒りに触れて皮張りの舟で流される話はあるが、一般には馬娘婚譚には漂流モチーフはない。（「遠野物語」拾遺七七話）。

西欧ではAT708番「怪物の母」が母子漂流譚のモチーフを持っている。この子は猫である。犬でもよさそうだが、採集例はない。猫の子は最後に人間にかわる。

(12) オランカイの話は三品の前述書四一六頁にあるが、水中の怪が洗濯女を犯す話は、わが国の丹塗矢説話にしても、中国の竜母伝説でも同じである。水辺で洗濯をしていたところ卵、桃、流木などが流れてきてはらみ、肉塊か竜を生む。これは山の上で女が寝ていると竜神が下りてきて子を生ませたという金太郎誕生譚とも同じだ。ただ日本の雷神は竜の姿で想像されても、なお、鍛鉄神のイメージが強く、水界との結びつきはそう大きくはない。

(13) 伊藤清司「花咲爺の源流」、一九七八。

なお「狗耕田」は兄弟葛藤譚である。その中で犬が田を耕すモチーフもむしろ付随的で、たまたま犂を引かせてみたら引っぱったというだけである。特別強力な屁をひる女が、木になっている果物を屁の力でふるい落としたといった話で、果物は偶発的で、他のモチーフでも交換可能なことと同じだ。ちなみに西欧では、馬を食い殺した狼が、司祭の命令で、馬のかわりに犂を引く話がある。狼耕田である。

(14) 「牛飼いと織女」「天牛郎配夫妻」の話は、村松一弥の『中国の民話』他にある。「天人女房譚」で、遺産分けで受けとった牛が水浴びに来る天人との仲をとりもってくれ、天女が天へ飛び帰ったときは、殺してもらって、その皮に主人公をくるんで天へ昇らせる。馬娘婚姻譚をも思わせる話で、「狗耕田」より性的要素が強い。

このタイプは君島久子によって「七夕型」として分類されている。北方に分布すると言う。（「中国の羽衣説話」『昔話の発生と伝播』一九八四）

(15) 内藤正敏「ヒョウトク譚のヘソに隠された金属伝承」『昔話研究の課題』一九八五。米をつくウスやモチをつくウスと、この金属精錬のウスは別のものとも思われるかもしれない。たしかにつきウスとひきウスはちがうが、ウスと言ったときに、その両方が同時に思いうかべられる文化もありうるだろう。ちなみに西欧では小麦の精粉に水車のひき臼を用いるから、金属精錬のひきウスのイメージは濃厚である。

(16) 逆に西欧の「ふしぎな馬」――「黄金の馬」――「金をひるロバ」がなぜ日本で「金をひる犬」にかわるのかを考えてもよい。ロバはまず日本では存在しないから他のものにならざるをえない。（金をひる馬のモチーフは、兄弟や隣人葛藤の狡智譚では日本でも使われるが、これは近年の輸入かもしれない）。馬も、乗用としては庶民の生活には無縁だった。西欧なら冒険旅行に出た少年がふしぎな馬に乗っていってもふしぎはないが、日本では支配階級の乗りしろに庶民の子が乗ることは考えられなかった。

また東北地方の農耕馬も、農耕専用で、遊興や旅の乗用にはまずなりえなかった。トラクターで物見遊山に行くことがないことにもひとしかったろう。

西欧では馬が、高価ではあっても、庶民の手に届かないものでは

必ずしもなかった。都会から遠くへだたった農村に住むものにとって、馬はむしろ必要不可欠な生活の手段だった。しかし、その馬にも上下・優劣があり、騎士の乗る馬は庶民にとっては高嶺の花だった。ということは、金で換算すれば金貨何枚にも相当するということで、「金の馬」というイメージがふさわしかった。

一方日本では、農民の生活に登場する換金商品は、米と絹だった。そこで米を食わせると金をひる小犬が想像されたし、蚕に変身する馬の話も出てきた。しかし、身近かな動物としては犬だった。米―金の連想のほうが絹―馬の連想より直接的である。生田滋の「東南アジアの建国神話」（『日本神話の比較研究』一九七四）によるとスマトラの王は黄金の精であり、同時に「穀物の霊」だった。

もうひとつ、日本の「黄金メルヒェン」として「金色姫」伝承を考えれば、蚕＝金という、より直接的な連想もでてくる。

(17) 山本明「伊具昔話集」一九六四

一般に、犬と人の結びつきでは昔話でも子はできないとされている。兵庫の「犬聟入」（『茂山孝子『温泉町の昔話』一九七二）に「犬だけえ子も出来りゃあせんだし」という表現がある。

「七人の子」というのはみな狩人の子で、犬とのあいだに子をもうけた話は聞かない。犬聟と犬祖のちがいである。蛇だと蛇の子は脇の下に三つうろこのあざがあるなどと言う。狐の子もいるが犬の子だけは（伝説、文学を除いて）いない。

ただし、山形には、ある寺の坊主が牝犬と夫婦になって女の子を生ませた話がある。娘は大きくなって寺にいられなくなると母親の犬とともに追いだされる。この娘が一緒になった相手が蛇の息子だというのも変わっているが、「見るなの座敷」のモチーフがあって、禁にそむいて覗くと、大蛇が出てくる。それを寺の坊主にもらっていた護符で退治して、蛇の息子と無事に結ばれる。（「庄内の昔話」『全国昔話資料集成』）

牝犬の昔話では沖縄に「犬女房」がある。主婦が死んだあと、飼っていた牝犬が自分の仔犬を崖からつき落として死なせて、家の子供に乳をやる。やがて、主人と一緒になる。変身をしていたとは語っていないが、「夫婦になった」と言っているので、人態であったように思われる。同じ沖縄の「猫女房」だと、猫が女に化けてきている。いや一般に狐でも鳥でも女に化けてくる。

(18) 西欧の竜は蛇との関連の薄い純然たる想像の産物で、悪魔の同義語であり（カラディッチ『スラブ民譚集』仏訳一九八七の注）、翼を有し、口から火を吐く怪物である。

猿も、ふつうはヨーロッパには存在しない。日本でこそ猿は人間にとって親しい存在だが、ヨーロッパでは猿というと熱帯のジャングルの半ば幻想的な動物を想像する。ニホンザルのイメージとそれはときとして大きくかけ離れている。

(19) 犬の話には炭焼が登場する。犬と言うと日本では猟師を想像するが、西欧では犬を連れた猟師のイメージは意外に少ない。猟師そのものが、支配階級のスポーツとして、庶民には禁じられていたこともある。森も領主の狩猟林には立入りが禁じられていた。一方、その領主たちの狩りでは、もちろん精悍な猟犬の群れが活躍する。しかし、これは「呪われた狩り」の伝承に見られるように、庶民にとっては恐怖と憎しみの対象だった。

炭焼きはひとつには村里から離れた森の中で、謎に包まれた生活をする存在で、往々にして秘密結社と融合したイメージを与えられていた。もうひとつは、木炭が日本と同じく金属の精錬に使われたことから金工民や鉱夫のイメージに結びついていた。鉱夫は、鉄の鉱夫でなく石炭の鉱夫でもよかった。フランス語では木炭も石炭もひとしくシャルボンと言い、シャルボニエは炭焼きであるとともに、炭売り、石炭売りでもあった。

(20) 「魚の王」（AT303）「親は魚」（AT705）「漁師とその妻」（AT555）のモチーフ。魚の王が水に放してもらうかわりに一、願いごとをかなえる、あるいは、二、子供を授ける。AT

316の「用水池の水の精」も、水に放してもらうかわりに魚がいくらでも取れるようにしてくれる。と同時に、そのとき生まれた子供に福を授ける。低ブルターニュの「鷹と水の精」（リュゼル）だと、父親に金貨を渡し、それを暖炉の石の上に置いておくと、煙突から金貨がいくらでも降ってくると言う。そう言いながらそれと引きかえに子供をさらっていこうとするのは、子供をさらっていったり、取りかえたりするとされる妖精族一般についての言い伝えに即したものだろうが、この水の精ももちろん魚の王であり、日本で言えば竜宮城の主ないしその眷属である。つまり、竜宮の乙姫が黄金子犬や、願いごとをかなえてくれる鼻たれ小僧をくれる話と同じと考えてよい。

(21) 「切れない綱」は金工民の秘密にかかわる特殊な金属のモチーフである。「白猿伝」では、女たちが猿を麻紐で縛るとさしもの強力の怪物も縛をほどくことができない。この猿はさらに全身鉄のようでただ一ヶ所以外は刀も通らない。鉄人伝承である。日本の猿神も、おおく全身を鉄のような剛毛でおおわれている。フェンリル狼をゆわえた鎖、白鳥になった子供たちの金の首輪、なども同じである。

(22) 中国の「狗耕田」の例では、遺産の分配で一頭の牛の頭と尻尾を兄弟がたがいに引きあうと、牛は兄の手に残り弟の手の中には尻尾についていた蚤しか残らない。この蚤をもとでに蘗しべ長者のように交換をつづけて、名犬を手に入れる。

関敬吾は、「蘗しべ長者型」の話はヨーロッパには見られないと言う（『大成』「蘗しべ長者」の項）が、たとえば猫一匹で巨富を手に入れる話などは不利な遺産がかえって幸いする話だし、痩馬、錆びた剣などがふしぎな力を発揮する話などは、昔話本来の価値の逆転の話であろう。

(23) 金工民の守護神、金屋子神が犬に吠えられて死んだ話も、犬と金属文化の接点を示している。

神話には犬頭人がいて、キリスト教伝説でも、聖クリストポロスは犬頭人だったと言う。そして鍛治師だった（ヴォラギーネ『黄金伝説』）。

大木卓氏は『犬のフォークロア』でよく各地の神話・伝説を集めているが、狗人国伝承以外、犬頭人伝承にはふれていない。

(24) 「ブルターニュ年報」一九九四、八―九号所収、リュゼル採集のもの。一頭の山羊だけを残して両親が死んだあと、妹とともに残された主人公は、その山羊を三匹の犬と交換する。そのときに犬たちをどこにいても呼びよせることのできる呼笛をもらう。主人公はこの犬たちのおかげで怪物を退治し、危地を脱し、王女と結ばれる。最後に三匹の犬は殺されて三人の王子になる。主人公をなきものにしようとした妹は地獄の井戸に投げこまれる。

(25) クロード・シュミットが『猟犬聖者伝』一九七九で歴史民俗学的研究をしている。日本では、たとえば『大語園』に紹介された「犬塚」（『七宝滝寺縁起』）では、しきりに吠える犬の首を斬ると、首が飛んでいって毒蛇を咬み殺す。

大木卓によれば、「ゲレルト伝説」と言う。（「犬のフォークロア」一九八七）。このばあいは、犬が狼を退治する。大木はこの話のもととして『パンチャタントラ』の「蛇から赤子を守ったマングースを誤解して殺した話」（一六一頁）をあげている。

(26) 「アイルランドの王の息子と魔法の手品師の物語」中の「ビン＝ブレアクの王子、または光の剣の物語」、ハイド編『アイルランド民譚集』一八九三、四〇一頁。

あとで見るように、この話には「鬼の腕」の話が出てくる。「ある晩、それまで一度も聞いたことのないような美しいメロディーが聞こえてきた。侍女たちは眠りこんでしまう。やがて一本の恐ろしい腕が煙突から下りてきて、揺りかごをさらっていこうとした」。狼がそれに食いついて噛みちぎる。しかし、揺りかごはさらわれてしまう。狼が子供を食べたと訴えられる。

(27) 「アーサーとゴーラゴン」では犬ではなくて狼であり、その点、

『メリヨンのレ』とも同じである。

この話はキットリッジがその研究論文の中で紹介したテクストで知られているが、近年、オッテンの『人狼の書』一九八六に翻訳が出て、読み易くなった。この話で特徴的な点は、狼になった王が牝狼と交わって二匹の仔狼をつくるところだ。一方『メリヨン』では、狼の群れをメリヨンが指揮するという「狼使い」的様相が特徴的であろう。

(28) アイルランドのリアノン神話でも生まれた子をさらわれる話が出てくるが、「白鳥の子供たち」（『ドロパトス』第七話）の話だと、子供がつぎつぎに子犬とすりかえられ、母親は、門の前に上半身だけ出して埋められ、犬の餌をあてがわれる。

リアノンは馬の女神とみなされるが、白鳥の母親は白鳥妖精であるとともに犬の血がまじっていたものと考えられる。アイルランドでは文化英雄クフーリンが鍛治師クランの犬を殺してから「クランの犬」という意味のクフーリンの名で呼ばれる。犬文化の匂いが濃厚である。

(29) 貧しい男が魔法の品の助けで王女を手に入れるが、王女はその魔法の品をとりあげて男をほおりだす。あるいは殺す。AT566の「三人兄弟」だと、たちどころに願った所へ行ける外套の力で王女をさらってゆくが、王女は外套を奪って逃げてゆく（「羽衣」モチーフとも通じあう）。魔法の指輪のばあいは、多く、犬と猫が指輪をとりもどしてくる。犬がやはりかかわっている。さらに多くのばあい、この指輪が最後は水中に落ちて魚にのみこまれ、釣りあげられた魚の腹から出てくる。魚の王が魚たちを集合させて見つけるばあいもある。魚の王や、竜宮小犬、そして失くした釣針などに通じあうモチーフである。

ちなみに「花咲爺」の冒頭も犬がたんに川を流れてくるだけではなく、魚取りのやなに犬がかかるのだ。犬を釣りあげるということにも等しい。釣りあげたものが富を与えてくれる。釣りあげた亀や蛤が美女にかわる—釣った魚が取り引きを申し出る—釣った魚の腹の中から指輪が出る—〈釣った〉犬が黄金を得させる。いずれも水界の主の授福譚であり、富を釣りあげるモチーフだ。

(30) 犬聟譚でも、犬が怪物（敵将）を殺す話のあとは、今度は犬が怪物になって、狩人に殺される。そのばあい、猟師の鉄砲の前に、いかな猛犬もあえない最後をとげる。文化と原始のちがいである。ところがその猟師を今度は女が剃刀で殺す。女の手でもやすやすと男の首を斬れるような、きわめて切れ味のよい剃刀が考えられる。

(31) 「天門山に赤犬あり。名づけて天狗と曰ふ」『山海経』、「天狗の状は大奔星の如く、声あり下りて地上に止れば狗に類す」『史記』、いずれも知切光蔵『天狗考』による。知切はこれを流星とするが、西欧の伝承では「呪われた狩」である。

伝説には天狗は頻出するが昔話には出てこない。中国系の説話とインド系の説話のちがい、あるいはより一般的に伝播型の説話と在来系の説話のちがいとも言えるかもしれない。

(32) ルクートゥも「犬頭人の神話」（『中世文明誌』一九九一）でほぼ同様の見解を示している。ゴードン・ホワイト『犬人間の神話』一九八四、も、ルクートゥも、インドの方角に女人国があり、そこでは男は犬として生まれ女だけ人体であると言っている。

これは「男は則ち人身にして狗頭、其声吠ゆる如し」と言う扶桑国伝を思わせる。

(33) 犬のイメージが日本と西欧で異っているとすれば、そのひとつは牧羊犬の存在だ。日本では牧畜、なかんずく羊の飼養は根づかなかった。犬は狩猟用として導入された。猟師は山々を漂泊する人々として、村人から恐れと不安の目で見られた。西欧ではその種の狩猟民はむしろ知られていなかった。狩猟は早くから支配者の楽しみとして統制され、王侯貴族の狩猟林には農民は立ち入ることすら許されなかった。

牧羊犬はしかし、牧畜をいとなむ農民にとってつねに親しい存在

であったとも限らない。村に定住する農民にとって、羊は、乳と羊毛を提供してくれる副収入源ではあったが、その羊を飼養、管理するには特別の技術を持った牧夫に依頼して、山の中に連れていってもらうのがふつうだった。農地は小麦やブドウを栽培したほうが収入が多かったし、牧草地としても、牛乳を出す乳牛や、肉として売れる肉牛の放牧地にしたほうが収益が大きかった。

羊はいきおい、牧夫にまかされて、夏のあいだ遠い山の中を移動しながら草を食べて、冬になって戻ってくるのだった。南フランスの牧夫は、そうやって各農家からあずかった羊を百頭、二百頭と導いて、アルプスの山中にまで千キロに及ぶ「山行き」（トランスユマンス）をするものだった。その「山行き」に際して、羊の群れを統率するのに犬は不可欠の存在だった。

しかし、そうやって羊や犬と山中で起居をともにし、半年のあいだ人里はなれた山の中を経巡って歩く牧人は、村人たちからは、恐れと疑いの目をもって見られたのも当然だった。西欧の牧夫と牧羊犬、日本の狩猟民と狩猟犬は、ともに、同じような不信の目をもって見られた。

それでも牧羊犬と狩猟犬はちがう。ことに日本の狩猟犬は狩猟の補助役ではなく、熊や猪を自身で仕止める主役である。

猿神退治のシッペイタローはあきらかに、熊犬系統の狩猟文化をあらわしている。「今昔」でも、「犬山といふこと」をする人とされている。

「北山の狗」でも、犬はひとりで鹿や猪をとってきて女に食べさせている。狩人としての犬である。西欧の昔話でも食べものを主人公に持ってくる犬は登場するが、番犬であって狩猟犬ではない。

(34) 犬と産習俗の関連については小森瑤子に「誕生と犬」（『日本民族学』一九五六）があるが、これもよくわからないもののひとつだ。産が軽いということでは、猫でも馬、牛でもさして変わりがない。小森は水神とのかかわりが鍵ではないかと見ている。

アイルランドのマハ伝承では、馬妖精と目されるマハが、馬との競争の場で出産する。リアノン伝承でも、盗まれた子が同時に生まれた馬の仔とともに育てられる。西欧では馬に出産の連関が濃い。

犬のかわりに狼が登場すると、「狼の産見舞」のように、むしろ産が重い。

(35) ディアーナ信仰は春の女たちの「山行き」の風俗をともなう。バッカス祭のオルギアにもその源があるとされているが、これは日本でも折口の『死者の書』に紹介されている「山遊び」、「磯遊び」と同じものだろう。ちがうとすれば、西欧で死の軍勢と結びつくディアーナ信仰が日本では、さほど荒々しい死神信仰には結びつかないところだろう。しかし、日本でも犬神信仰には、すくなくともディアーナ信仰中の犬の果たすものと同じ死の導き手の役割が見られよう。

犬神信仰ないし、犬神事例は、狐つき、蛇神使いの例に準ずる憑きもの現象だが、犬神使いが「イザナギ流」の巫術師であるばあいには、飯綱使いに近くなる。憑かれたものの症状が目立つばあいと、憑かせるものの仕業がくり返し目撃されるばあいはちがったものと考えられる。「犬憑き」はあまり聞かない。「犬神」は犬の霊と考えられ、姿は見えないから、狐や蛇とは異なっている。それでも犬と無関係ではない。

(36) ピレネ、バスク地方には男の妖精ラミナ（あるいはラミナック）野性人ないし人食い鬼のバサ＝ジョーンがいる。セルカンの『バスク地方の民話と伝説』一八七八には、「魂のない鬼」の類語としての「バサ＝ジョーンの最後」が収められている。が、一般に、山の中に住んでいると想像された「山人」をバサ＝ジョーンと言う。

(37) 文化史的文脈では、古い口承文芸はたいてい金属、繊維、農耕のどれかの技術の発見に結びついている。狩猟、漁撈文化のレヴェルの驚きや感謝を物語り化することがおおい神話、それも創世神話とのちがいである。昔話を中心とした民話は、定着文化の庶民の日々

の営みを物語り化する。犬の物語でも、したがって、狼祖神話に近いような犬祖神話なら狩猟文化をあらわしていよう。しかし、昔話化した犬聟には村の生活がある。

(38) モーパッサンの「狂人?」(似たタイトルで「狂人」「ある狂人」がある)は嫉妬の物語だ。夢中に愛していた妻が、あるときから急によそよそしくなった。その妻が馬に乗って来たときには異様に息をはずませ、目を輝かせている。妻が馬を愛していることを確信した男は、馬を駆けさせる小道に綱を張り渡して待ち構える。馬が綱に引っかかってもんどり打って転がる。転げながら男を噛もうとする馬の耳に男はピストルをあてがって引金を引く。とその途端に男の顔に鞭が振り下ろされる。妻が武者ぶりついてくる。男は彼女に向かって二発目の弾を撃つ。

ピストルを持っていたのが女だったら、確実に女のほうが男を殺していた。馬と女の愛情は本物だった。その馬を殺す男を、女は、たとえ「七人の子があっても」殺していただろう。

一方、わが国では中勘助の『犬』が特異な変身のモチーフを語り、多和田葉子が「犬聟入」で、昔話を材料として、正常者たちの社会から排除されてゆく人々を「犬」のしるしのもとに描いた。